

イヴァン4世のチェンガ銀貨

中村雅之

1. イヴァン大公治下の銀貨

酒井俊昭氏より古代文字資料館に寄託されたロシア・コインが3種ある。ここに紹介するのはその中の1枚で、イヴァン4世が大公であった時代の銀貨である。



イヴァン4世は1530年生まれ、1533年に3歳でモスクワ大公となり、1547年以降はツァーリ(皇帝)と称した。表面(写真左)は太刀を持った騎士、裏面(写真右)には「大公イヴァン」と記されている。1547年以降のコインには「ツァーリにして大公……」と記される。

2. 銘文解説

本銀貨では上部と右端がやや欠けているが、Lang1955 に見える他の同種の銘文を参考にすれば、1行目は「КНСЬ(公)」、2行目は「ВЕЛКІ(大)」、3行目は「ІВАН(イヴァン)」となる。

本資料では1行目が「КН」の下半分しか見えない。他の資料では「КНСЬ(公)」の上に波型の記号が見えるものもある。綴りの部分省略を意味するチルダ記号で、ロシア語でチトロ(титло)と呼ばれるものである。ここでは母音が省略されている。「КНСЬ」は現代ロシア語では「КНЯЗЬ」と綴られ、おおむね「クニャーシ」のように読む。小林潔2004によれば、チトロ記号は18世紀の文字改革で、アカデミーによって廃止された。

現代ロシア語では用いられない字母「S」は古くは破擦音を表したが、16世紀のロシア語ではすでに「З」と等価([z]あるいは[s])になっていた。「S」も18世紀に廃止される。

2行目の「ВЕЛКІ(大)」は「ВЕЛІ」と「К」の左半分までしか確認できない。現代ロシア語の綴りは「ВЕЛИКИЙ」である(おおむね「ヴィリーキー」のように読む)。「И」と等価であった「І」は1918年の文字改革で廃止され、「И」に統一された。なお、現代ロシア語で「大公」は「ВЕЛИКИЙ КНЯЗЬ」の語順になる。ツァーリとなった1547年以降のイヴァン4世の貨幣銘文

には同様の語順が記されることもある。

3. 字形

この貨幣銘文の字形の大きな特徴として、以下の3点が挙げられる。

- ① 「K」の左右が「I C」のように離れる。(2行目の右端には「K」の左半分のみが直前の「I」と同じように見えている。)
- ② 「A」が「d」のように記される。(3行目の左から3字目)
- ③ 「H」の横線が左上がりになっており、ラテン文字の「N」に似ている。(3行目右端)

以上のうち、①と②はほぼイヴァン大公治下の貨幣銘文に共通の特徴。③は他の貨幣では明瞭でないことも多い。なお、母音字母「И」が「H」のように記されることも多く、その場合、「И」と「H」の区別はほとんど確認できないことになる。

<参考文献>

D.M.Lang. 1955. A Hoard of Sixteenth and Seventeenth Century Russian Silver Coins,
Numerismatic Chronicle Sixth Series, Vol.XIV.

小林潔. 2004. 『ロシアの文字の話』, ユーラシア・ブックレット 57, 東京:東洋書店.